

# アメリカ 1980 年代の宗教現象

— いわゆるキリスト教右翼と「解放の神学」を中心に —

高山 眞知子\*

## はじめに

この時代に際立って来る宗教の非主流派的現象は、白人のキリスト教右翼の胎頭と黒人の「解放の神学」である。共にすぐ前の時代のリベラルな連邦最高裁判所判事グループ「ウォレン・コート」(1952年～69年)の二つの判決に関連している。すなわち、「解放の神学」は、「ブラウン判決」(1954年、公立学校における黒白別学への違憲判決)を契機に盛り上がった公民権運動(63年ワシントン大行進、64年公民権法、65年投票権法、65年マルコム X の死、67年長い夏の諸暴動、68年キング師の死など)の弾みの中から生まれた。他方、キリスト教右翼の胎頭は、公立学校における祈りへの違憲判決(62年)と公立学校の卒業式における宗教儀礼の禁止の判決(63年)に関連するが、こちらの方は判決の弾みの中からではなく、判決に対抗する形で盛り上がっていった。

本稿執筆時の2006年初頭現在、「解放の神学」は既に沈静化して久しいが、キリスト教右翼の方はその後ますます盛り上がり、彼等の支持する中絶反対論(プロライフ論)が最高裁新判事指名の最大の争点になったり、新たな反進化論(インテリジェント・デザイン説)の公立学校における扱い方が問題になったりしている。また一方、黒人

の支持政党である民主党から次期大統領立候補をめざすヒラリー・クリントン上院議員は、2005年夏のニューオーリンズ大洪水の共和党政権による未処理にかんがみ、「下院はプランテーション民主主義である」と批判して物議を醸している。

本稿ではこの二つの宗教現象をアメリカ憲法制定時の諸事情に遡りながら解明を試みたい。手法としては歴史人口学や社会人類学が意外と手懸かりとなり、説明要因として「薄められた領土民主主義」という現実が浮かび上がってきた。以下それを説明してみたい。

## 1. 「解放の神学」の隆盛化

日本の文部省唱歌として広く親しまれたフォスターのアメリカ民謡「ケンタッキーの我が家」、「麗しのヴァージニア」、「おおスザンナ」などは、今日のアメリカではPCポリティカル・コレクティブネス(政治的適切性)の点から実質的に禁書ならぬ禁歌となっている。一方、黒人霊歌やブルースは広く知られている。共に南北戦争前の南部の歌であるが、フォスターは白人側から見えた黒人を歌って明るく、他方黒人霊歌は暗く沈んでいる。黒人の生活・身分は本当は一体どの様なものだったのだろうか？ 本稿の「解放の神学」の登場を理解するためには、まず黒人の生活の前史を知らねばならない。最近の「黒人研究」ブラック・スタディーズの成果はいろいろと意外なことを教えてくれる。

まず、北米のイギリス植民地への最初の黒人は、メイフラワー号より一年早い1619年に、アフリカではなく英領西インド諸島から、奴隷ではなく

2006年1月20日受付

\* 江戸川大学 社会学部人間社会学科教授 社会学, アメリカ研究

キーワード: キリスト教右翼, 解放の神学, ウォレン・コート, ジェームス・コーン, テレビ伝道師, 原理主義性, 親族構造と神話, 中絶論争

年季奉公人としてやって来た。南部のサトウキビ・タバコなどのプランテーション大農園で働くうちに徐々に奴隷制度が成立するが、それでも常に黒人の一割は自由民であったという。独立直後の1787年北西部（オハイオ川と五大湖の間）では奴隷制は廃止された。しかしまたまその直後の1793年に綿繰機が発明されて、綿花栽培用に黒人労働力への需要が急増する。ところが、奴隷輸入貿易は公式には1807年に廃止された。その理由は、①北西部条令で予定されていたこと、②貿易コストが嵩み、アフリカで黒人が払底したこと、③アメリカでは奴隷黒人の出生率が高く、国内で労働力として“自給”できるようになったためである。それ以後の奴隷売買とは、国内での売買のことである。売買の際、一般に夫婦や親子が無惨にも引き裂かれて取引されたというイメージが強いが、実際は基本的には“セット”で取引されていたという。そして黒人夫婦の出産率は、当時の白人のそれと同じかそれを上まわるものであったという。

南北戦争までに奴隷輸入貿易は廃止されて半世紀以上を過ぎていたから、その当時の黒人は“移住者”としては二世・三世以上の者が大半を占めていたことになる。一般にどの民族であれ移民の三世以後は出身地の文化を失いがちなものであるが、黒人の場合は到着国アメリカのプランテーションでキリスト教を与えられていた。たしかに西インド諸島では黒人が多数派であったためアフリカの伝統文化が残っていたが、渡米後の黒人は各地に分散し世代を重ね、キリスト教に従うようになっていた。

では、黒人は、キリスト教を押し付けられたのか？ これこそが、本稿の主題「解放の神学」の登場との関係で重要な点である。南北戦争前の西部（今日の中西部）では、バプティストやメソジスト系の巡回牧師がキリスト教を布教しており、それは黒人の間にも広まった。奴隷制の是非をめぐって教会は分裂し、南部ではサザン・メソジストなど、奴隷制を容認する分派も生まれ、さらに南北戦争敗北後の南部再建期の、いわゆる人種隔離容認期（1896年「プレッシー対ファーゴン

ン事件」への最高裁判決以後、「隔離すれども平等」の原則が可とされ、人頭税・識字テスト・祖父条項などの実施された時期）には、黒人と白人は同じキリスト教の別々の教会に集った。ここで黒人達は教会を中心として黒人だけのコミュニティとライフ・スタイルを形成してゆく。（ちなみに、このような村の多少牧歌的な情景は、今日アメリカで切手にもなって国際的に知られる黒人男性舞踊家アルヴィン・エイリーの出世作「レベレーションズ」（啓示）に活き活きと表現されている。）黒人教会の牧師は同時に地域のリーダーでもあり、その中からやがて黒人社会福音運動の活動家が登場する。黒人と白人の新たな非隔離の体験という点からは、両大戦における軍隊経験や軍需産業の伸展に伴う黒人の都市への移動が重要であるが、そのような体験を背景に牧師層の中から自覚的なリーダーが現れるのであり、後のキング師もその父もそのようなリーダーであった。

さて、「解放の神学」のリーダーとなるジェームス・コーンは、その様な黒人の村のひとつアーカンソー州の寒村ビアーデンに1938年牧師の子として生まれた。コーンは、黒人と白人の分離された教会・学校に通い、牧師になることを志して、やがてシカゴで神学を学びデトロイトの神学校に就職する。振り返るとコーンの青春・学歴・人格形成期は、いわば南部・中西部の「バイブル・ベルト」の中を農村から都市へと北上し、しかも偶然にも公民権運動上のさまざまな大事件（1956年キング師をデビューさせたアラバマ州モンゴメリーのバス・ボイコット事件など）に居合わせたことになる。コーンはシカゴ近郊の名門ノースウェスタン大学院で西欧的な神学の研究（『カール・バルトの人間論』）により博士号を取得（65年）し、デトロイトで就職（66年）するのであるが、時代の現実の動きと研究内容との乖離に悩むのである。そこへ67年に長い暑い夏のデトロイト暴動、68年にテネシー州メンフィスでキング師の殺害が起こる。この様な中、コーンは、うなされたように『黒人神学とブラック・パワー』（69年）を著し、一躍注目され、ニューヨークの名門「ユニオン神学校」へ迎えられる（69年）。

続けて『解放のための黒人神学』(70年),『黒人霊歌とブルース — 一つの解釈 —』(72年),『抑圧された者の神』(75年)を著し,アメリカ国内で活躍するほか,アフリカ,西インド諸島,ヨーロッパなどに講演旅行する。日本にも1975年に来日している。

(ところで,「解放の神学」と呼ばれる現象は,南米にも存在するが,こちらはカソリック教会を中心に左翼的でもあり,合衆国とは別系統の展開を示しているので,本稿では,アメリカで「解放の神学」と呼ばれているプロテスタント系のコーンの思想の紹介に限ることとする。)

さてまず,『黒人神学とブラック・パワー』は,白人のプロテスタント系の神学へのアンチテーゼである。白人神学がアメリカ史上,奴隷制や黒人差別を黙認してきたことを指摘し,また黒人が白人の蔑視に慣れてきたことを振り返り,それらとは逆の黒人中心の神学というものの存在理由を主唱したものである。理論的には,スイスの神学者カール・バルトの神学のナチス批判性を参照しつつ,アメリカにおけるバルト神学の政治不関与性を批判するのである。

『黒人霊歌とブルース — 一つの解釈 —』は,バルト,ブルンナー,ティリッヒなど白人の西欧神学を離れて,コーンの育ったアーカンソー州の寒村の黒人教会の原体験を想起しながら,黒人の音楽の盛り上がりの中に現れている「ブラックネス」について,神学というよりは直観的な宗教性・生の肯定を説明しようとする。特に,黒人霊歌は阿片的な敗北主義であるとする通説を批判し,歌詞の隠された二重の意味(たとえば,ヨルダン川とは自由州・奴隷州の境のオハイオ川のことであることを黒人は皆知っていた,など)の指摘を通して,現世での解放への積極的志向のあったことを明らかにする。また,一見世俗歌であるブルースの中に,黒人の日常の自己肯定性を認める。たとえば男女関係の強調は,奴隷解放後の貧しい黒人達にとっての人間関係の絆の重要性を表している,とするなどである。

『抑圧された者の神』では,知識社会学の手法を用いてさらに論理的に黒人神学の正当性を主唱

する。「宗教は阿片なり」と言ったマルクスや,「現実というリアリティは社会的に構築されたものである」というピーター・バーガーの構築主義も十分に参照されている。そして,イエス・キリストの把握の仕方として,①実在した歴史上の人物であり,そのユダヤ性の体験は黒人の体験と重なりとし,また②十字架から復活した点で人間以上の存在であり,また③やがて再臨するはずの神であり,そのようなイエスこそ,奴隷となった黒人(それ以前には自由であった)の解放の神である,と理解するのである。

コーンのこれらの著作・思想は,多くの神学校で黒人牧師の養成教育に用いられ,また「全国黒人聖職者会議」の「黒人神学の声明」に採用され,各地の黒人教会に広まっていった。なるほどコーンの登場以前から公民権運動はブラック・パワーや「ブラック・イズ・ビューティフル」の標語で盛り上がり,さまざまなタイプのリーダーを生み出していた。たとえば,黒人解放の手段としての宗教を否定した「ブラック・パンサー」,キリスト教や非暴力主義を否定したマルコム X の「ブラック・ムスリム」,キリスト教の伝統の中の社会福音主義運動に連なる非暴力的政治活動派のキング師などであるが,圧倒的多数の普通の黒人は,魂の救済(「アメイジング・グレース」の)を中心志向とする非行動的な黒人教会に身を潜めていたのであり,コーンがそのような多数派に訴える形で黒人神学の考え方を跡付けて見せ,宗教的・神学的に黒人の自尊心の回復への論理を提供したことは,大きな意味があったと言えよう。

さて,その後であるが,1986年にはキング師生誕記念日の全米的祝日化や,ジェシー・ジャクソンの大統領立候補を始めとして,黒人への社会的認知にはなかなか目覚ましいものがあった。その背景には,黒人の南部農村から北部大都市への移動・南部のサンベルト化があり,黒人の平均所得の上昇と多様化(中産階級化とアンダークラス化)が起こる。(ちなみにこの頃の音楽が,デトロイトのマイケル・ジャクソンとニューヨークのヒップホップである。)この時代の黒人の生活の変化についての興味深い分析としては,①この南

部黒人の北部工業都市への移動を、いわば第三世界からの移住に擬えて、その世代間の上昇速度を他の移民民族グループの上昇速度と比べ、決して遜色のないものであるとするもの（リバーソンとソウエルの説）、また②周知のような黒人のアンダークラスの福祉依存のシングル・マザーの多さ（約五割）について、それを黒人男性の貧困という通説ではなく、黒人の男女性比の歴史的不均衡の加速化（女 100 人对男 70 人）から説明するものもある（サウスの説）。またこの時期に際立って来ることは、リーダー的な黒人が、牧師などの宗教分野よりも政治行政経済などの分野に進出しはじめたことである。また黒人として初めて最高裁判事に就任したクラレンス・トマスは、アフェーマティブ・アクション黒人特別優遇措置に反対する。このように眺めると、コーンの「解放の神学」は黒人の社会的上昇にとって一過性のものであったと言うことになるのであろうか？

その様な点から注目すべきは、80 年代の黒人の状況の中で従来とほとんど変わらなかったのが、黒人と白人の人種間の婚姻率の低さ（黒人女性で約 1%）である。一般に「社会的距離尺度」として、学校・教会・居住区域・結婚などの共有が人間的親しさの指標とされているが、その様な点から振り返ると、80 年代の黒人の進出と白人の反応には興味深いものがある。つまり、黒人が以下の諸点で何かを獲得した途端に、多くの白人は次の様な反応を起こしたのである。①黒人が黒白共学の公立学校へ通い始めた途端に、白人は私立学校へ移り始めた。②黒人が都市中心部へやって来た途端に、白人は郊外に移り始めた。③黒人が投票権を行使し始めた途端に、白人の投票棄権率が昇り始めた。④兵役を通して非隔離の体験を始めた途端に、兵役は徴兵制から志願制になり、白人の代表比率が減った。⑤黒人のシングル・マザーが急増している一方で、白人の民族間の混交婚比率は高まっている。そして⑥（次節で示すように）黒人が「アフリカ系アメリカ人」という名称で文化多元主義・自然科学に基づく人種平等観の中で認知された途端に、白人の間で反自然科学・反進化論の「インテリジェント・デザイン説」による

いわば「エデンの園系アメリカ人」というアイデンティティが生まれようとしている。すでに 1830 年にトクヴィルは奴隷解放のなされた北西部について、黒人の法的平等の広まる途端に習俗としての隔離が強化されることを、目撃していた。

コーンは、久し振りの著作『マーティンとマルコムとアメリカ——夢か悪夢か』（1991 年）で、キング師とマルコム X を比較検討した上、末尾で次のように述べている。「60 年代と今日の人種主義の違いは、それが巧妙で隠微になったことである。……キリスト教の人種主義という癌を切除する最良の執刀医はマルコム X である。」としている。たしかにマルコム X を継ぐ「ブラック・ナショナリズム」の「ネイション・オヴ・イスラム」の伸展は目覚ましい。この流れの中から 1996 年にはルイス・ファラカン主導の黒人男性による「ワシントン百万人大行進」が盛り上がった。コーンの「解放の神学」が神学であったのに対し、「ブラック・ナショナリズム」は実質的には一種の新宗教運動と言えよう。ここでは「ナショナリズム」の意味は、通常の政治的な民族主義・国民主義・分離的国家主義などではなく、「黒人奴隷という屈辱の体験の思い出を共有する（特に女性より死亡率の高い男性の）自尊心の共同体」という風なものである。しかしところが誠に皮肉なことに、イスラム世界をその一極とする「文明の衝突」的な同時多発テロが 2001 年に起こってしまい、「ブラック・ムスリム」の黒人はアメリカ社会との関係で実に複雑なアイデンティティの形成を迫られることになるのである（ルイジアナのイラク戦争志願兵の黒人は一体何のために命をささげるのか……？）。

## 2. キリスト教右翼の胎頭

周知のようにアメリカの宗教の主流派とは白人・イギリス系アメリカ人のキリスト教プロテスタント系（いわゆる WASP）の伝統的諸教派のことである。1960 年代・70 年代にはこれらの教派の教会への出席率が低下した。一方で興隆してきたフレンジンクリズムのが、それまで非主流であった原理主義的な宗教

性である。これは聖書を神の言葉として字義通りに解釈（いわゆる聖書直解主義）し、教義を単に親世代からの伝統として受け継ぐのではなく、個々の信徒の霊的<sup>ホーン・アゲイン</sup>回心再生体験を重視する。テレビ伝道師を通して広まり、実践的政治メッセージを発し、80年代にはレーガン等共和党大統領候補の当選に寄与したとされている。

このような宗教性の興隆は当初予測されておらず、むしろ主流派教派の衰退の目立ち始めた頃に指摘されたのは、「世俗化現象」ということであった。科学精神の普及・消費文化の快楽主義・福祉政策の非宗教的ヒューマニズム・対抗的ヒッピー文化の余波などの中で、宗教は衰え少なくとも私事化・多様化してゆくと考えられていたのである。ところが予想に反した事態が展開し始め、原因の分析が試みられた。その代表例が宗教社会学者ロドニー・スタークである。彼は全米を地域ごとに調査し、1985年次のような結果を発表した。①かつて主流派教派の強かった「バイブル・ベルト」（聖書地帯）である中西部や南部では、リヴァイヴァル現象としての原理主義性が隆盛化し、②主流派の伝統が弱く新しい転入居住者の多い地域では、新宗教的革新が発生しやすいことである。つまり原理主義性は、主流派教派が存在しながらもそれが儀礼化・形骸化したところで、その内部からの「リヴァイヴァル」（<sup>ファンダメンタル</sup>原点回帰による信仰心再生）として起こったということになる。

スタークの他にもこの現象をアメリカの宗教史のサイクルの中で位置付けようとする学者は存在する。ノーベル賞経済学者ロバート・フォージェルは、第四次大覚醒と見なす。森孝一氏は1920年代の「モンキー裁判」等の反進化論主義・ポピュリズムの再興と見なす。島蘭進氏はホフシュタッターの指摘した「アメリカの反知性主義の伝統」の再来と見なすなどである。なお、この現象を、マスメディアの時代にテレビ伝道師に踊らされただけとする説もあるが、そもそもゲーテンベルグの印刷術により聖書が急速に普及したように、一般に宗教はそれぞれの時代に利用しうる先端のメディアと対応して広まるものであり、その様に考えるならば、テレビ伝道は特異なこととは言えない

いだろう。むしろ、受け皿となる心性が常に存在すること自体の方が重大であろう。

歴史的にはバイブル・ベルトの白人<sup>マジョリティ</sup>多数派の住人は、「声高か」になった時代と「声を潜めて」いた時代とがあった。声高かになったのは、19世紀末の銀貨自由鑄造運動、社会福音運動、20世紀初頭の禁酒法運動、第七日安息日運動、1920年代の「モンキー裁判」など、「ポピュリズム」と呼ばれる運動であった。しかし、禁酒法の解禁、モンキー裁判の敗北などにより、「声を潜める」ようになっていた。ところが、この層こそが、1950年代・60年代のリベラルな最高裁ウォレン・コート<sup>グリーン・バック・パーティ</sup>の判決により、それまで自分達の実践していた「人種隔離」を禁じられ、「公立学校での祈り」を禁じられた層なのである。本稿の「キリスト教右翼の胎頭」とは、まさにこの層の政治的な「再・声高か化」のことに他ならない。では、なぜそうなったのだろうか？

一般に社会人類学の知見では、親族構造とそれを支える神話・規範を、あらゆる社会の必須要素であると見なす。この知見に照らすと、バイブル・ベルトの人々にとって「公立学校における祈りの禁止」は、子供（社会の新たな成員）の社会化の手段としての既存のキリスト教神話の剥奪であり、また60年代の対抗的ヒッピー文化のもたらした価値観（ボルノ解禁、婚外交渉、離婚の寛大視、同棲・同性愛公認等）は、伝統的な親族構造の性のルール（いわゆる「家族的価値」<sup>ファミリー・ヴァリュー</sup>）への正面からの挑戦であったと言えよう。また対抗文化の無意識的な宗教性の開花（東洋の瞑想、サイケデリック、シャーマニズム、ドラッグ、ロックやヘビメタルの悪魔主義など）は、一面ではハイテク的でグローバルな資本主義社会という新しい状況への、身体レベルでの無意識の悲鳴の表現であったかもしれないが、結局、新しい神話や親族構造のルールを、少なくともバイブル・ベルトでは呈示するに至らなかった。子供も中年化した大人もいわば無規範の海に投げ出されたようなものである。（ちなみにここではロックのマイケル・ボルトンの「漂って」（Drift Away）が聴こえて来る。）そこへ、テレビ伝道師がどこか聞き覚えのある確

信と靈感に満ちた声で語り始めるのである。

1970年にケーブル・テレビ用電波が利用しやすくなり、日曜の午前中は多くのチャンネルで教会の礼拝場面が放映されるようになった。この様な中から何人かの伝道のスーパー・スターが現れた。ビリー・グラハム、オラル・ロバーツ、ジェリー・フォルウェル、パット・ロバートソンなどである。彼等は皆、個人的な霊的再生体験を含む宗教的教養・訓練を積んだタレントであり、テレビの画面から親しげに（たとえ視聴者がパジャマを着ているが、途中で冷蔵庫へビールを取りに行こうが）話しかける。また礼拝のコーラスも生き活きとダイナミックで、あたかも裏番組のMTVと競っているかのようだ。そして献金の機会が与えられる。このようなスタイルで「テレヴァンジェリスト」が登場した。「テレヴァンジェリスト」とは、テレビでエヴァンジェリズム（福音伝道）を行う人の意である。しかも単に説教をするのではなく、信仰心に基づいた日常的倫理行動を要求する（さらに森孝一氏の定義では、最近のエヴァンジェリストとは、政治化した原理主義者のことである）。テレヴァンジェリストの代表例として、ジェリー・ファルウェルを見てみよう。彼は、1933年ヴァージニア州リンチバーグで生まれた。やがてそこから「オールタイム・ゴスペル・アワー」というラジオ・テレビ番組を全国に流し、「モラル・マジョリティ・レポート」という機関誌を発行し、キリスト教を憶えている聴衆に断固立ち上がることを呼びかけるのである。このようにして、「声を潜めていた」（サイレントな）マジョリティが、「声高か」な「モラル・マジョリティ」（道徳的な多数派）として組織化されていったのである。

しかし、マジョリティの人々が「声高か化」した上で、政治化、共和党化してゆくプロセスは、自明だったとは言えない。最初に原理主義的な宗教性を自認して登場した大統領は民主党のカーターだったのである。彼は共和党ニクソンのスキャンダルへの浄化作用として登場した。しかしカーターは妊娠中絶賛成派（プロ・チョイス）であり、その点がまず民主党の従来支持層であるカソリッ

ク系を離反させることになった。これに目を付けたのが共和党であり、レーガンは、カーターと同じく宗教的再生体験ボーン・アゲインを持ちながら、かつ中絶反対派（プロ・ライフ）として登場し当選するのである。

中絶論争・進化論争・福祉政策論争は、一見別個のものようであるが、実は支持基盤の点で関連している。カソリック系も含め一般に低所得者層は多産であるが、中絶には反対である。中間層は上昇志向の故に少子化の傾向を持ち、中絶は容認的、かつ高福祉政策の財源として高率の課税の対象となることに反感を抱き、特に多産の低所得世帯へ手厚く再配分されることを苦々しく思っている。さらに進化論とは、社会ダーウィニズムの弱肉強食・適者生存説であって、資本主義の競争原理の本質的過酷さをいわば肯定する考え方であり、それは、自己を適者（勝者）と感ずることのできない多くの中間層・低所得者層には、きわめて不愉快な世界観と映る。対するに聖書によれば、人間の起源は神に祝福された「エデンの園」のアダムとイヴなのであり、またイエス・キリストは処女マリアから、中絶されずにひっそりと生まれ、人類の罪と愚かさを背負ってくれていることになっている。このように眺めると、中絶論争・進化論争の背後には、「もしかしたらつま端らない者（敗者）かもしれないが、とにかく生まれてしまったこの自分という者を、どう受け入れるか」という、認知的不協和の問題、自尊心・アイデンティティの危機の問題が絡んでいる。そこで、聖書を受け入れ、たとえ少子化のための避妊であれ、神の与え賜うた生命の中絶のようなことは絶対に避けるべきであるとの結論に至るのである。

この様にして、「モラル・マジョリティ」のキリスト教的価値観が、共和党化していった。そしてその共和党が実現させようとするのが、ウォレン・コートの判決の逆転、つまり、「公立学校における祈りの禁止」の廃止を新しい憲法修正条項として制定することであり、最高裁判事に中絶反対論者を指名することなのである。

## おわりに

ウォレン・コートのリベラルな判決への対応として盛り上がった黒人の「解放の神学」と白人の「キリスト教右翼」を、憲法制定当時に遡って整理してみたい。まず、アメリカ独立戦争はイギリスの砂糖条令への反対から始まったのであり、アメリカ憲法も南部諸州の奴隷制は認めていた。当時のエリートの多くは大農園主であり、黒人の人口比も高く、黒人は白人の5分の3人として数えられた。南北戦争後の憲法修正に則り奴隷解放・公民権・投票権獲得が戦われてゆくわけだが、「解放の神学」はその困難な道のりの延長線上に生まれたものである。

他方、建国時の憲法修正第一条（政教分離）は、言外に、当時の習俗としての信仰心の実在と宗教とはキリスト教なりとの自明視があり、その上で諸教派と国家の関係を定めたものである。つまり、多少ニュアンスの差はあれ一般市民であるイギリス系アメリカ人の日常規範として、キリスト教はいわば「市民宗教」として実在していた。社会人類学的に言い換えれば、市民宗教・習俗としてのキリスト教が親族構造のルールと神話を提供していた。時代が下って非キリスト教系移民がやって来るようになり、修正第一条は言外の習俗を離れて字義通りに解釈されてゆく（それがウォレン・コートの「公立学校における祈りの禁止」の意味である）が、マジョリティの市民の日常規範としてのキリスト教は厳存していたのである。「キリスト教右翼」とは詰まるところ、建国当時から修正第一条の言外の前提として存在した習俗からの揺れ戻しと言えるのではなかろうか？

そして、黒人と白人の関係であるが、1830年のトクヴィルは、ムラート（白人と黒人の混血）はイギリス系アメリカ人に最も少ないのを目撃していた。今日も黒人と白人はそれぞれに内婚的であり、混交の婚姻率はほとんど増加していない。そして神話として、黒人から「ブラック・ムスリム」、白人からは「エデンの園系アメリカ人」が生まれようとしている。つまり、建国時のシヴィ

ル（市民）の宗教、シヴィル（公民）の権利<sup>ライト</sup>を持たぬ者の排除を前提として出発した歴史の慣性は、今日もマジョリティの人々の無意識の習俗の中に作用していると、言わざるをえないのであろう。

最後にもう一言。①フランスは革命直後にユダヤ人を解放した（1791年）が、もしフランスがルイジアナを売却（1803年）していなかったら、フランスはアメリカ南部で綿花栽培のために奴隷制を実施していただろうか？ その場合トクヴィルは何を見るのだろうか？ フランス人と黒人のムラート？ ②日本でもアメリカと同じ時代に砂糖と木綿の自給が始まる。鎖国日本では黒人奴隷の代わりに誰がそれらを栽培したのだろうか。そもそもロバート・ベラの「市民宗教」の観念は、彼の江戸研究に基づいている……。今日は、「ザワワ、ザワワのサトウキビ畑」の向こうには、黒人兵がいて、ムラートの安室奈美恵がいる……。フランス人も日本人も、アメリカの一見珍妙な宗教現象を冷笑していれば良い訳ではないのである。

## 参考文献

- 五十嵐武士, 2000年「多民族社会と国民的統合のしくみ」, 五十嵐武士編『アメリカの多民族体制——「民族」の創出——』, 東京大学出版会。
- 梶原 寿, 1997年『解放の神学』, 清水書院。
- 川勝平太, 2003年『経済史入門』, 日本経済新聞社。
- 川北 稔, 1994年「奴隷貿易」, 「三角貿易」, 川北稔編『歴史学辞典・第一巻・交換と消費』, 弘文堂。
- 近藤 健, 2005年『アメリカの内なる文化戦争——なぜブッシュは再選されたか——』, 日本評論社。
- 島蘭 進, 1992年「民衆のキリスト教と現代——ペンテコステ運動からネオ・ペンテコステ運動へ——」, 井門富二夫編『アメリカの宗教・第二巻・多元社会の宗教集団』, 大明堂。
- 高山真知子, 1995年「信仰心の復活と台頭するキリスト教右翼」, 五十嵐武士・古矢旬・松本礼二編『アメリカの社会と政治』, 有斐閣。
- 坪内隆彦, 1997年『キリスト教原理主義のアメリカ』, 亜紀書房。
- トクヴィル, アレクシス・ド（松本礼二訳）, 2005年『アメリカのデモクラシー』第一巻・下, 岩波書店。
- トッド, エマニュエル（石崎晴己・東松秀雄訳）, 1999年『移民の運命——同化か隔離か——』, 藤原書店。
- 蓮見博昭, 2002年『宗教に揺れるアメリカ』, 日本評

- 論社。
- 松岡 泰, 1995 年「アメリカ社会の変化と黒人問題の変容」, 五十嵐武士・古矢旬・松本礼二編『アメリカの社会と政治』, 有斐閣。
- 森 孝一, 1996 年『宗教からよむ「アメリカ」』, 講談社。
- 森 孝一, 1997 年『アメリカと宗教』, 日本国際問題研究所。
- 森 孝一, 2004 年「アメリカの「見えざる国教」再考」, 『アメリカ研究・第三八巻』, アメリカ学会。
- Ciment, James, 2001, *Atlas of African American History*, checkmark Books, NY, NY.
- Cone, James H., 1975, *God of the Oppressed*, Orbis Books, Maryknoll, NY. (梶原寿訳, 1976 年『抑圧された者の神』, 新教出版社)
- Cone, James H., 1972, *The Spirituals and the Blues, An Interpretation*, Orbis Books, Maryknoll, NY. (梶原寿訳, 1983 年『黒人霊歌とブルース — アメリカ黒人の信仰と神学 —』, 新教出版社)
- Cone, James H., 1991, *Martin & Malcolm & America — A Dream or a Nightmare —*, Orbis Books, Maryknoll, NY. (梶原寿訳, 1996 年『夢か悪夢か — キング牧師とマルコム X』, 日本基督教団出版局)
- Stark, Rodney and Bainbridge, William Sims, 1985, *The Future of Religion — Secularization, Revival and Cult Formation*, University of California Press, Berkeley, CA.
- Stark, Rodney, 2001, *Sociology*, Wadsworth, Thomson Learning, Belmont, CA.
- 付記 本稿の内容の一部は変更・縮小した形で以下に掲載の予定である。五十嵐武士編『原典アメリカ史・第八巻「衰退論の登場」— 1975 年から 1990 年 —』, 岩波書店・近刊。